

聖書：マタイ 13：24～43

説教題：御国で太陽のように輝く

日時：2019年7月14日（朝拝）

13章にはたとえ話がたくさん出て来ます。一つ目は先週見た「種蒔きのたとえ」でした。そして今日見る最初のたとえは一般に「毒麦のたとえ」と呼ばれます。一つ目のたとえは、イエス様に対する人々の反応はなぜ色々なのかという問いに答えるものでした。弟子たちはイエス様の教えこそ神の使者なる方の言葉として受け入れていましたが、皆がそうであるわけではありません。むしろ多くの人々が拒絶し、反対活動さえして来る。どうして人々の反応は色々なのか。それに対して一つ目のたとえのポイントは、種は同じでも、それを受け入れる土壌が違うからということでした。道端の人のように心が固くては御言葉を受け付けないし、また土の薄い岩地のような人、あるいは茨の土地のような人であっても、種は成長せず、枯れてしまう。しかしその心が良い地である人は御言葉をしっかり受け止め、ある人は100倍、ある人は60倍、ある人は30倍の実を結ぶと言われました。この「良い地」というカテゴリーに入る人たちの間にも色々な程度の違いがあります。いかに聞こうとする心で御言葉を聞くかで大きく変わるということでした。

今日は2つ目のたとえです。一つ目のたとえで、なぜ人々の反応は色々なのか、なぜイエス様の言葉を受け入れない人々がいるのかということは分かりましたが、次の問いは、なぜイエス様に反対する人々はそのままなのかということです。なぜイエス様はメシヤなら、ご自身に逆らう者たちをさばかないのか。イエス様が本当に神の国を地上にもたらしているなら、その支配はもっとはっきり現されるべきではないか。なのに世界は大きく変わっていないように見える。悪は引き続きのさばっている。この問いは前に見たバプテスマのヨハネの問いとも似ています。彼もメシヤの到来によって、すぐに神のさばきが起ることを期待していました。そこで人々に「悔い改めよ！」と呼びかけました。しかしいつまで経っても何も変わりません。そのうちに自分は捕らえられ、牢屋の中につながれています。そこから解放される気配はありません。そんな中、彼はイエス様のところに弟子を遣わして「おいでになるはずのお方はあなたでしょうか？」と問いました。本当にあなたはキリストなのでしょうか？と。それと同じ問いに対して答えているのが今日のたとえです。

イエス様はこんなたとえを話されました。ある人が自分の畑に良い種を蒔いた。後の解説から分かりますように、これはイエス様の働きのことです。イエス様が良い種を蒔いています。これによって神の国が現れ始めています。しかしそこに敵がやって来て毒麦を蒔きます。敵とはサタンのことです。サタンがこうして妨害活動をしているわけです。種は小さく、それが夜ひそかに蒔かれた状態では、そこにある種が良いものなのか悪いものなのか、一見したところ区別はできません。しかしそれが芽を出し、実った時、異変が現れて来ました。そこに毒麦も一緒に生えていることが明らかになったわけです。これは大変な状況です。さてどうするか。しもべたちは主人のところに来て、「それでは私たちが行って、毒麦を抜き集めましょうか。」と言います。つまりさっさとかたをつけてしまいましょう！ということです。悪にさばきを下してしまいましょう！ということです。ところが主人は「ならぬ」と言います。そうすれば良い麦も一緒に抜き取ってしまうかもしれない。だからそのままにしておきなさいと言います。ここに神の国が現れているところにも、最後まで「善」と「悪」が同居し続けることが述べられています。私たちは悪は早く取り除いてしまいたいと思います。早く白黒つけたいと願います。しかし神はそのままに！と言うのです。それは「毒麦を抜き集めるうちに、麦も一緒に抜き取るかもしれない」からということです。

しばしば、この両者の見分けは難しいものです。毒麦を取るつもりで、間違っただけの良い麦も取ってしまう危険がないとも言えません。少し前にイエス様について「傷んだ葦を折ることもなく、くすぶる灯芯を消すこともない」とありましたが、私たちの目から見たら、それらは回復の見込みのない悪い麦、腐るだけの麦と思い、抜き取ってしまうかもしれません。そうしたらイエス様のお心とはかけ離れたことになってしまいます。

私たちは実際の信仰生活でいくらかそのようなことを経験しているのではないのでしょうか。あの人は立派な信仰者だ、あの人は立派な良い麦だと思われる人がいます。ところがその人が後になって信仰を捨てる。あるいは教会で大きな問題を起こして去って行く。まさかの毒麦！実際、聖書はイエス様の 12 弟子の中にも毒麦がいたことを示しています。イスカリオテのユダです。最初はそう見えませんでした。彼は 12 弟子の会計係をしていましたが、それは彼が周りから信頼されるような人であったことを暗示しています。その彼が実は！ということだったのです。反対に本当の信仰は持っていないように見える人もいます。あまりパツとしないし、礼拝に来ない時もあるし、救いの喜びを持っているのかどうか、傍目から見るとはなはだ疑問。ところがその人がやがて神

の前で真に良い麦であることが判明するということがあり得ます。私たちの判断はそのように誤り得るものです。むしろ誤りだらけと言った方がいいかもしれない。よく言われるように、私たちが天国に行った時に発見するだろうことは、当然そこにいるだろうと思っていた人がそこにはいなくて、逆にまさかそこにはいないだろうと思っていた人がそこにいるということです。ですから早くに抜くようなことをするな！とされています。神は忍耐して待っておられます。なお悪の存在と活動を許しています。それは真の麦を一つ残らず祝福へ導くためです。

しかしこのたとえが教えているもう一つのことは、この善と悪が入り混じった状態は、いつまでも続くのではないということです。やがて良い麦と毒麦がより分けられ、毒麦が火に投げ込まれる日が来る。一方、ふさわしく成長し、良い実を結んだ正しい麦が収穫され、天の倉に納められる日が来る。すなわち天国に入れられる日が来る。こうして神のご計画がみな実現する日が来るのです。それまでは毒麦と混じっていたために良く見えなかった神の国ははっきり示され、明らかにされる日が来るのです。

イエス様はさらに二つのたとえを語られました。一つは 31～32 節の「からし種のたとえ」です。皆さんはからし種を見たことがあるでしょうか。私はからし種がラップされているしおりを持っていたことがあります。ゴマ粒よりも小さいものです。ところがそれは畑に蒔いて成長すると、どの野菜よりも大きくなって木となる。そして空の鳥が来て、その枝に巣を作るようになる。つまり小さく、取るに足りないものが、後で信じられないほど大きなものに変貌するということです。天の御国はそのようなものであるとイエス様は言われます。

33 節の「パン種のたとえ」も同じです。イースト菌はただの粉のようです。それ自体には何の力もないようです。しかしそれを小麦粉の中に混ぜるとパン生地をあのように膨らませます。驚くべき変化です。ですから今、神の国の現れが私たちの目に小さく見えるからと言って軽蔑してはならない。それは私たちの想像をはるかに超える結果をやがてもたらず、とてつもない力を秘めた種なのです。

さて 34 節にはイエス様がたとえで次々に話されたことについて、こう記されています。「イエスは、これらのことをみな、たとえで群衆に話された。たとえを使わずには何も話されなかった。」 イエス様がたとえで話された理由については、先週見た 13 節

でこう言われていました。「わたしが彼らにたとえで話すのは、彼らが見てはいるが見ず、聞いてはいるが聞かず、悟ることもしないからです。」 イエス様は聞く気がない人、受け入れるつもりのない人には、真理をそのまま語らず、たとえにくるんで語る。そうすることによって彼らは益々真理が分からなくなるという報いあるいは裁きを受けることが言われていました。しかしたとえには聞く気がある人に対する積極的な目的もあることを先週も述べました。その人はたとえをとおして天の御国についてより良く思い巡らし、益々豊かにその世界に生きる人とされる。35 節も、その良い目的と関連しています。この 35 節は詩篇 78 篇 2 節からの引用です。詩篇 78 篇 2 節：「私は口を開いてたとえ話を、昔からの謎を、語ろう。」 この旧約の御言葉が成就する仕方で、イエス様はたとえを語られたと言われています。イエス様はこのたとえ話によって何を語ったのでしょうか。詩篇 78 篇 2 節によれば、それは「昔からの謎」です。また今読んでいる 35 節によれば「世界の基が据えられたときから隠されていること」です。つまりこれは永遠の昔から神がずっと秘めて来られたご計画と言えます。あるいはこの章の 11 節には「天の御国の奥義」という表現もありました。であるなら、イエス様がたとえで語っておられることは非常に重大であるということになります。イエス様はこれらのたとえによって、世の初めから神が秘めて来られた特別の真理を語っておられるということになります。その昔からの謎、あるいは奥義とは、神が救い主を遣わすことによって与えて下さる救いのことと言えます。イエス様の受肉、地上の生涯、十字架、復活などのみわざを通して与える救いのことです。その隠されて来た奥義が、ついにイエス様のたとえを通して真の意味で語られ始めている。ですからそのたとえはよくよく耳の穴をこぼして聞かなければなりません。これは単なるクイズやゲームではないのです。長い間、秘められて来た神の国の奥義が、これらのたとえを通して私たちの前に差し出されているのです。ですから今日の箇所最後の 43 節でも「耳のある者は聞きなさい！」と言われています。

さて 36 節以降でイエス様は家に入り、弟子たちに先のたとえの意味を説き明かされました。ここから 2 つのメッセージを心に留めて今日のまとめとしたいと思います。その一つは、私たちが期待するような理想的な状態が見られなくてもガッカリしない、失望しないということです。私たちも急ぎやすい者です。バプテスマのヨハネのように早く神の国の完全な現れを見たいと願います。しかし私たちは悪を行っている人が栄え、主に信頼する者が何の報いも受けないような状況を見たり、あるいは自分自身が経験したりします。そういう中にあると、主に信頼して従う生活をしていても空しいのではないか、

あまり意味がないのではないかと考える誘惑を受けます。しかしそうではない。世の終わりまで善と悪は同居します。収穫の日まで毒麦は抜かれぬままです。しかしいつまでもそうではない。必ず神がより分け、41 節にあるように、すべてのつまずきと不法を行う者たちを御国から取り集めてさばく日が来るのです。そのことを信じて、忍耐して、今の時を過ごすべきであるということです。その待つ間、神の国の現れが私たちの期待よりも小さく見えても、これを侮蔑すべきではありません。実際、イエス様がこの言葉を語られた当時、イエス様を信じ、従う人たちはほんの一握りしかいなかったでしょう。地域的にも限定されていました。ところが今やどうでしょうか。キリスト教は全世界に宣べ伝えられ、全世界的に見れば一番宗教人口の多い宗教となっています。また世界に最も大きな影響を与えている宗教と言えます。この東洋の端にある日本にも伝えられて来ました。まさにからし種のとえ、パン種のとえの通りです。確かに私たちが住む日本では、まだまだそれは小さな状態かもしれません。しかし神の国には力があります。私たちはそれを蔑まず、このたとえに良く良く教えられ、励まされて、期待をもってその歩みを続けたいのです。

そしてもう一つは、やがての日にすべてのつまずきと不法を行う者たちが火の燃える炉の中に投げ込まれる一方、主に信頼し、主を待ち望む者は父の御国で太陽のように輝くと言われていることです。誰が太陽のように輝くのでしょうか。私たちは御国に行って、ただ神が太陽のように輝くを見るだけではないのです。ここで言われているのは私たち自身が太陽のように輝くということです。この後、17 章 2 節にはイエス様が高い山で御姿が変わり、「顔は太陽のように輝いた」という表現が出て来ます。その表現とそっくりの表現がここにあります。つまり私たちもそのイエス様に似る者にされるのです。ヨハネの黙示録 21 章 23 節には、やがての天国について「都は、これを照らす太陽も月も必要としない。神の栄光が都を照らし、子羊が都の明かりだからである。」と書かれています。また「もはや夜がない。神である主が彼らを照らされるので、ともしびの光も太陽の光もいらぬ。」とあります。しかし神とキリストが太陽のように輝くだけでなく、私たちもまた、そのような者とされるということです。コロサイ人への手紙 3 章 4 節：「あなたがたのいのちであるキリストが現れると、そのときあなたがたも、キリストとともに栄光のうちに現れます。」これは現在の私たちと何と違うのでしょうか。私たちは自分を見て将来、自分が太陽のように輝く者となることを信じられるでしょうか。太陽のようにまぶしい人とは素晴らしい魅力を放っている人のことです。単に外側がそ

うなるだけでなく、神やイエス様の聖さ、愛、義、あわれみ、善といったご性質を映し出す者となることによって、そうなるのです。私たち一人一人がその日には完全に聖められて、太陽のような栄光と輝きに満ちた者とされると言われています。

今はまだ悩みがあり、戦いがあり、理想から程遠い状態にある私たちです。しかしイエス様は素晴らしい真理をたとえを通して語ってくださいました。世界の基が据えられる前から隠されていた神秘をイエス様はたとえによって教えてくださいました。私たちはこれに真剣に聞き入り、また十分に思い巡らす者でしょうか。私たちはこのメシヤなる方に信頼して、失望せず、イエス様が語ってくださる御言葉に引き続き導かれて行きたいと思います。そしてやがて神が定められた日に、私たち自身が父の御国で太陽のように輝く者とされることを望み、楽しみにして、イエス様がなお広げておられる天の御国の幸いに生かされて行く者でありたいと思います。